

合せが heterozygous を示す例と homozygous を示す例とが存在する，即ちこれらの腫瘍発生は一元的ではなく，第一減数分裂前の diploid の胚細胞から発生する例 (heterozygous) と第一減数分裂後の胚細胞から発生する例 (homozygous) の少くとも二種類が存在することが明らかにされた。尚，今回の成績では，独立した2個の成熟卵子の合体という機序を示唆する例はなかつた。

30. 卵巣胎児性癌の組織発生に関する一考察，特に Nude Mouse 移植系を用いて (慈恵医大)

天崎 博文，大川 清，小池 清彦
吉川 充，寺島 芳輝，蜂屋 祥一

性腺胚細胞由来腫瘍は生体内での腫瘍動態が不明である。我々は Nude Mouse 移植胎児性癌の継代でその一端を明らかにした。移植原組織は A.f.P 高値の Endodermal sinus tumor ovarii (E.S.T) と AFP, HCG, detectable の Embryonal carcinoma adult, testis (EM) であつた。移植後両腫瘍は発育順調であり，EM は5週目より嚢腫形成を示し，継代で発育速度は共に更に増加した。EM 嚢腫内容は血清様で AFP は常時20万 ng/val 以上を示した。移植後 EST は形態的に分泌吸収細胞，Goblet cell 等の上皮細胞，骨，線維細胞等の間葉細胞を含み，EST と連続を示した。これら吸収，分泌細胞，goblet cell は alkaline phosphatase 活性をもち，又電顕的にも分化形の吸収，分泌 cell, goblet cell の形態を示したが，細胞質内に anulate lanellae をもち発育の早さもうかがわれた。現在継代は間葉系細胞のみで時にこれは線維肉腫様変化を示した。EM は移植後この形態は Reticular, Solid そして Endodermal sinus 型をもつ EST に主成分をかえ，構成細胞は星芒状細胞が主体で中に腺状，島状に大形，細胞質の豊富な細胞より成っている。Hyaline globules はいづれの細胞中にもみられた。一部 Mouse 固有の間質に接する部では骨形成と間葉系細胞の集団をみた。電顕では大形細胞は基底膜欠如，微絨毛をもつ上皮様細胞で lipid, 小胞体等所見より人卵黄囊 endoderm と関連を疑がわせたが，星芒細胞との移行も認めた。以上 EST はその構成々分に分化多能性細胞を含み，一方 EM は機能，形態的に EST に変化した。以上の所見は従来推測の域を脱せなかつた腫瘍化胚細胞の生体内での運命を明確とし，一方胚細胞系腫瘍の生体内での“ふるまい”の一端を明示し，さらに今後の胚細胞系腫瘍の臨床的扱いにも一考を用することが明らかになった。

質問 (大阪警察病院) 澤田 益臣

1. 蛍光抗体法，酵素抗体法による AFP 局在部位の検索。もし，されておられましたらお教え下さい。

2. 移植前と，NM 移植後の AFP との間に生化学的差違認められましたでしょうか。

答弁 (慈恵医大) 天崎 博文

1) 今迄の所行つてはおりません。

2) 差異はない。

質問 (静岡日赤病院) 林 博厚

1. 組織形態が変化して来たと言うが，何代目からでしょうか。変化したと言うよりは，継代による Selection ではないのか？

2. もし変化(分化又は脱分化(?))と考えるならば，種々の薬剤による induction で原組織の形態に戻せると考えられるか？

答弁 (慈恵医大) 天崎 博文

1) 初代移植からである。

すべて組織の隣接組織を光顕にて検索しているので，contaminationとは思わない。

2) 分化について，薬剤による分化の促進は考えられる。

31. 実験的卵巣腫瘍に関する研究—特に clipping 法並びにホルモン負荷による発生成績について—

(久留米大)

広瀬 宜之，荒木 純夫，綱脇 現
井手 又橋，薬師寺道明，加藤 俊

ヒト卵巣腫瘍の組織発生あるいは内分泌学的な性格との関連性などについては従来より多くの研究がなされてきたが未だ一致した見解がないことは周知のごとくである。

我々はこのような問題点について実験的卵巣腫瘍の立場から検討を試みつつあり，化学的発癌物質による腫瘍の発生成績についてはすでに報告してきた。今回はホルモン投与が腫瘍発生にどのような影響を及ぼすかという問題について各種ホルモン剤 (Gestagen, Estrogen, Androgen, HCG, ACTH) を負荷して検討してみた。その結果，腫瘍の発生に要する日数は非投与群に比して早く，腫瘍発育速度も促進される傾向がみられた。本実験は正常な生体 (下垂体摘除などの処置を行っていない) への投与ではあるが少なくともその腫瘍発生とホルモン負荷との関連性が示唆されると思われる。尚，発生した腫瘍の種類はホルモン非負荷群と同様な腫瘍群で，Sarcoma, Adenocarcinoma, fibroadenoma に分類でき